

# 病害虫発生予察情報（5月予報）

令和7年4月25日  
静岡県病害虫防除所長

## 1 予報概況

作物名	病害虫名	予報 (5月の県平均平年値)	予報の根拠
稲	縞葉枯病 (ヒメトビウンカ)	縞葉枯病発生量：やや少 ヒメトビウンカ発生量：やや多	昨年8月発生量 縞葉枯病：少 (－) ヒメトビウンカ：やや多 (＋) 気象予報：気温：高い (＋) 降水量：並か少ない (±)
小麦	赤かび病	発生量：やや少	4月上旬発生量：少(発生なし) (－) 気象予報：気温：高い (＋) 降水量：並か少ない (±)
ばれいしょ	疫病	発生量：少 (発病株率 6.6%)	4月中旬発生量：少(発生なし) (－) 気象予報：気温：高い (＋) 降水量：並か少ない (±)
	ジャガイモガ	発生量：並 (寄生株率 0.3%)	4月中旬発生量：並(発生なし) (±) 気象予報：気温：高い (＋) 降水量：並か少ない (±)
	アブラムシ類	発生量：並 (寄生株率 19.4%)	4月中旬発生量：少 (－) 気象予報：気温：高い (＋) 降水量：並か少ない (＋)
温州みかん	かいよう病	発生量：やや少 (発病度 0.01)	4月上中旬発生量：少 (－) 気象予報：気温：高い (＋) 降水量：並か少ない (±)
中晩柑類	かいよう病	発生量：多 (発病度 0.04)	4月上中旬発生量：多 (＋) 気象予報：気温：高い (＋) 降水量：並か少ない (±)
キウイ フルーツ	かいよう病	発生量：少	4月中旬発生量：少 (－) 気象予報：気温：高い (－) 降水量：並か少ない (±)
果樹全般	果樹カメムシ類	発生量：多	予察灯誘殺数：多 (＋) フェロモントラップ誘殺数：多 (＋) 越冬量：多 (＋) 気象予報：気温：高い (＋) 降水量：並か少ない (＋)

作物名	病害虫名	予報 (5月の県平均平年値)	予報の根拠
茶	チャハマキ	発生量：多 (寄生虫数 0.6 頭/1.25 m <sup>2</sup> ) 発生時期：並～やや早い	4月中旬発生量：やや多 (＋) トラップ誘殺数：多 (＋) 気象予報：気温：高い (＋) 降水量：並か少ない (±)
	チャノコカクモン ハマキ	発生量：やや多 (寄生虫数 0.2 頭/1.25 m <sup>2</sup> ) 発生時期：並～やや早い	4月中旬発生量：やや少 (－) 防除員からの情報：やや多 (＋) トラップ誘殺数：多 (＋) 気象予報：気温：高い (＋) 降水量：並か少ない (±)
	チャノキイロ アザミウマ	発生量：並 (叩き落とし虫数 3.7 頭/4 か所)	4月中旬発生量：少 (－) 気象予報：気温：高い (＋) 降水量：並か少ない (±)
	チャノミドリ ヒメヨコバイ	発生量：並 (叩き落とし虫数 1.9 頭/4 か所)	4月中旬発生量：少 (－) 気象予報：気温：高い (＋) 降水量：並か少ない (±)
	カンザワハダニ	発生量：多 (摘採面寄生葉率 2.6%)	4月中旬発生量：やや多 (＋) ただし、中部、東部地域で多 (＋) 天敵(カブリダニ類)発生量：少 (＋) 気象予報：気温：高い (＋) 降水量：並か少ない (±)
	クワシロ カイガラムシ	発生量：やや少 発生時期：並 (5月未調査)	4月中旬発生量：少 (－) 気象予報：気温：高い (＋) 降水量：並か少ない (±)

#### 表の見方について

- ・ 予報の発生量は平年(静岡県のごく過去 10 年間)との比較で、「少、やや少、平年並、やや多、多」の 5 段階で示しています。
- ・ 予報の根拠には、巡回調査に基づく発生状況(調査時期と発生量)、気象庁の1ヶ月予報(気温と降水量)を記入しています。その状況が多発要因の場合は(＋)、少発要因の場合は(－)を示し、＋－を総合的に判断して発生時期、発生量を予想しています。

**農薬情報  
はこちら  
で検索!**

**静岡県農薬安全使用指針  
・ 農作物病害虫防除基準**

<https://www.s-boujo.jp/>

**静岡県病害虫防除所 HP  
が新しくなりました。**

**静岡県病害虫防除所 HP**

<https://www.pref.shizuoka.jp/sangyos/higoto/norinjimusho/1058658/boujo/index.html>

## 2 予報の根拠と防除対策

### 【稲】

#### ●縞葉枯病（ヒメトビウンカ）

##### 予報の根拠

- ・昨年8月の巡回調査では、縞葉枯病の発生は見られなかった（平年0.5%）が、媒介虫であるヒメトビウンカの最多寄生虫数の平均は1.4頭/株（平年1.0頭/株）と平年よりやや多かった。
- ・1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並か少ないため、ヒメトビウンカの増殖を助長する。このため、本病の発生も助長される。

##### 防除対策

- ・発生地域において普通期以降に作付を行う場合、縞葉枯病抵抗性品種（あいちのかおり SBL・にじのきらめき）を利用する。
- ・発生地域ではヒメトビウンカ対策として育苗箱施用剤を施用する。

#### <その他の病害虫>

#### ●苗立枯病、いもち病(苗いもち)、ばか苗病、もみ枯細菌病、イネシンガレセンチュウ

種子消毒（作業を省かず、以下の点に留意して行う。）

- ・自家採種の種もみは塩水選を必ず行う。
- ・[「農薬安全使用指針・農作物病害虫防除基準」](#)に掲載の種子消毒法の手順を守り実施する。
- ・厚播きは発病を助長するため、適正な種子量を守る。

##### 育苗管理

- ・出芽期は30℃以上、緑化期以降は25℃以上の高温とならないよう、できるだけ温度管理に注意する。
- ・他県ではQoI剤耐性いもち病菌が発生し問題となっており、本県でも発生が懸念される。耐性菌の発生リスクが高い薬剤を使用する場合は、連用を避けるなど適切に使用する。詳細は日本植物病理学会殺菌剤耐性菌研究会ホームページの「殺菌剤使用ガイドライン」（<http://www.taiseikin.jp/guidelines/>）を参照。

#### ●スクミリンゴガイ（ジャンボタニシ）

- ・県内全域で分布が拡大している。
- ・例年5月以降に活動を開始し、移植後の苗を食害するため、普通期栽培水田では、移植後の薬剤処理を実施する。また、移植後2～3週間は食害を抑制するため、浅水管理（4cm以下）に努める。周辺水路内に泥が残っていると、その中でも越冬している可能性があるため、水路から泥を上げて貝を破碎する。
- ・スクミリンゴガイには寄生虫（広東住血線虫）が寄生している可能性があるため、貝に触る場合は必ずゴム手袋をはめること。

## 【小麦】

### ＜生育の概況＞

生育は平年より遅い。

### ●赤かび病

#### 予報の根拠

- ・ 4月上旬の巡回調査では発生は確認されなかった（4月上旬：平年発病なし）。
- ・ 1か月予報では、降水量は平年並か少ないが、気温は平年より高いため、発生を助長する（赤かび病は出穂期以降の日平均気温が18～20℃、多湿条件下で発生が助長される）。

#### 防除対策

- ・ 開花期～乳熟期にかけて感染する。防除適期は開花期頃である。コムギの生育状況をよく確認し、防除を実施する。
- ・ 降雨によって多発することがあるため注意する。
- ・ 日平均気温が18～20℃で降雨が続く場合には、追加防除を行う。

### ＜その他の病害虫＞

### ●うどんこ病・赤さび病

- ・ 4月上旬の巡回調査では、うどんこ病の発病株率は1.0%（平年17.7%）と平年より少なかった。赤さび病の発病株率は1.4%（平年2.3%）と平年より少なかった。
- ・ 発生を確認したら速やかに薬剤防除を実施する。
- ・ 静岡県奨励品種である「きぬあかり」はうどんこ病に弱く、また「イワイノダイチ」、「農林61号」より赤さび病も発生しやすい。そのため、開花期に赤かび病との同時防除を行う。

### ●ハモグリバエ類

- ・ 4月上旬の巡回調査では寄生株率1.8%（平年6.8%）と平年より少なかった。
- ・ ほ場内の発生に注意し、多発した場合は薬剤により防除する。

## 【ばれいしょ】

### ＜生育の概況＞

生育は平年並～やや遅く推移している。

### ●疫病

#### 予報の根拠

- ・ 4月中旬の巡回調査では発生は認められなかった（平年発病株率2.6%）。
- ・ 1か月予報では、降水量は平年並か少ないが、気温は平年より高いため、発生をやや助長する。

#### 防除対策

- ・ 感染適温は18～20℃であり、開花期以降に気温が15℃以上、かつ降雨により湿度が高い状態が継続すると発病しやすくなる。
- ・ 発病に好適な気温下で降雨が続くと本病は急速にまん延する。多発生すると防除は困難になるので、開花期前からの予防散布を行い、発生初期のうちに防除する。

## ●ジャガイモガ

### 予報の根拠

- ・4月中旬の巡回調査では、寄生は確認されなかった（平年発生なし）。
- ・1か月予報では、降水量は平年並か少なく、気温は平年より高いため、発生をやや助長する。

### 防除対策

- ・葉での被害は少なく目立たないが、塊茎での被害を回避するため、開花期以降に防除する。

## ●アブラムシ類

### 予報の根拠

- ・4月中旬の巡回調査では、寄生株率は6.2%（平年13.1%）と平年より少なかった。
- ・1か月予報では、降水量は平年並か少なく、気温は平年より高いため、発生を助長する。

### 防除対策

- ・気温の上昇とともに発生量の増加が予想されるので、低密度のうちに防除する。
- ・ほ場内や周辺において、アブラムシ類の発生源となる雑草を除去する。

## 【温州みかん】

### <生育の概況>

県果樹研究センター（静岡市清水区）における発芽期は、宮川早生で4月2日（平年4月2日）、青島温州で3月28日（平年3月31日）と、平年並～やや早かった。また、同様に開花始期は、宮川早生で5月2日（平年より4日早い）、青島温州で5月3日（平年より1日遅い）と予想される。

## ●かいよう病

### 予報の根拠

- ・4月上中旬の巡回調査では、発病度は0.1（平年値0.3）と平年より少なかった。
- ・1か月予報では、降水量は平年並か少ないが、気温は平年より高いため、発生をやや助長する。

### 防除対策

- ・感染適温は20～30℃であり、風雨により伝染する。5～6月に雨が多いと多発する。
- ・昨年または現時点で本病の発生が確認されているほ場では、中晩柑類に準じた防除を行う。ただし、5～7月の銅剤散布は中晩柑類に比べて薬害が出やすい。
- ・風ずれなどの傷口から病原菌が容易に侵入するため、防風垣、防風網の整備を行い防風対策に努める。

## <その他の病害虫>

### ●そうか病

- ・ 3月上中旬の巡回調査では、平均発病度は0.04（平年0.06）であり平年並だった。4月上中旬の巡回調査では、平均発病度は0.10（平年値なし）であり、発生が増加した。
- ・ 1か月予報では、降水量は平年並か少ないが、気温は平年より高いため、本病の発生をやや助長する。
- ・ 感染適温は20～26℃で、5～6月に雨が多いと果実で多発する。
- ・ 発芽期以降、越冬病斑から新葉へ降雨のたびに伝染する。新葉の病斑から幼果に二次伝染するため、展葉期、5月下旬（落弁直後）、6月下旬（幼果期）に薬剤防除を行う。
- ・ 苗、若木での発生が多い病害であるため、新植や改植をしたほ場では発生に注意する。

### ●ミカンハダニ

- ・ 4月上中旬の巡回調査では、平均寄生葉率は6.9%（平年7.0%）と平年並であった。
- ・ 地域別の平均寄生葉率は、東部地域で0.3%（平年3.2%）、中部地域で12.6%（平年10.8%）、西部地域で7.7%（平年7.0%）であった。
- ・ 1か月予報では、降水量は平年並か少なく、気温は平年より高いため、発生を助長する。
- ・ 着果前は果実への実害は生じない。ただし、葉に多発すると落葉を助長することもあるため注意する。
- ・ マシン油乳剤を散布する場合、散布直後の降雨で防除効果が低下することから、晴天が数日続くと見込まれる際に防除を実施する。

## 【中晩柑類】

### <生育の概況>

県伊豆農業研究センター（東伊豆町）における発芽期は、平年並～やや遅い。また、同様に開花始期は、平年より3～4日遅いと予想される。

### ●かいよう病

#### 予報の根拠

- ・ 4月上中旬の巡回調査では、発病度は2.9（平年値0.8）と平年より多かった。
- ・ 1か月予報では、降水量は平年並か少ないが、気温は平年より高いため、発生をやや助長する。

#### 防除対策

- ・ 感染適温は20～30℃であり、風雨により伝染する。5～6月に雨が多いと多発する。
- ・ 発芽期以降、越冬病斑から新葉へ降雨のたびに伝染する。新葉の病斑から幼果に二次伝染するため、5月上旬及び下旬、6月中下旬（梅雨期）に薬剤防除を行う。
- ・ 銅剤を散布する際は薬害軽減のため炭酸カルシウム剤を加用する。
- ・ 風ずれなどの傷口から病原菌が容易に侵入するため、防風垣、防風網の整備を行い防風対策に努める。

## 【かき】

### <生育の概況>

県果樹研究センター（静岡市清水区）における発芽期は、前川次郎、四ツ溝とも4月7日であった。

### <その他の病害虫>

#### ●チャノキイロアザミウマ

- ・アメダスデータを用いたシミュレーションによると、第1世代成虫の発生時期は産地により時期が異なり、5月8～22日（昨年より7日程度遅い）と予想される。
- ・産地ごとの詳細な防除時期は、病害虫防除所ホームページ「[防除時期等予測](#)」を参照する。

## 【キウイフルーツ】

### <生育の概況>

県果樹研究センター（静岡市清水区）におけるヘイワードの発芽期は、3月30日であった。

#### ●かいよう病

##### 予報の根拠

- ・4月中旬の巡回調査では、発病葉率は0.7%（過去9年間の平均発病葉率2.3%）と平年より少なかった。
- ・1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並か少ないため、発生を特には助長しない。

##### 防除対策

- ・感染適温は10～20℃であり、風雨により伝染する。
- ・細菌病であり、樹体内に病原菌が侵入すると根本的な治癒は困難であるため、防除は予防が中心となる。
- ・受粉結実後～果実肥大期までに予防的に防除を実施する。ただし、花芽伸長開始後は使用する薬剤によっては薬害が出るため薬害が出にくいコサイド3000を使用し、薬害軽減のため炭酸カルシウム剤を加用する。
- ・風ずれなどの傷口から感染するため、防風垣、防風網の整備を行い防風対策に努める。
- ・管理作業時に付着した罹病樹の樹液により感染が拡大するため、せん定器具はこまめに消毒する。

## 【果樹全般】

### ●果樹カメムシ類（チャバネアオカメムシ、ツヤアオカメムシ、クサギカメムシ）

#### 予報の根拠

- ・2～3月の越冬量調査（県内20地点）において、チャバネアオカメムシ越冬量／落葉1㎡は、県平均2.9頭（平年1.0頭）と平年より多かった。また、各地域における同種の越冬量／落葉1㎡は、東部地域1.6頭（平年1.3頭）、中部地域4.2頭（平年0.9頭）、西部地域2.9頭（平年1.0頭）と、特に中西部で平年より多かった。
- ・県内4か所の予察灯におけるカメムシ類の誘殺は、4月中旬から確認され始め、特にツヤアオカメムシの誘殺が目立っている。
- ・県内6か所のフェロモントラップにおけるカメムシ類の誘殺は、4月中旬から確認され始め、チャバネアオカメムシ及びツヤアオカメムシの誘殺が目立っている。特に、磐田市においては、これら2種の誘殺が急増している。
- ・カメムシ類の主な餌となるヒノキ球果の着果量は、隔年で豊凶を繰り返すことが多い。昨年は着果量が平年より多かったことから、本年は着果量が平年より少ないと予想される。カメムシ類の餌が不足することにより、本虫が新たな餌を求めて4～8月にかけて果樹園に大量飛来し、花・果実等を加害する恐れがある。
- ・1か月予報では、降水量は平年並か少なく、気温は平年より高いため、本虫の発生を助長する。

#### 防除対策

- ・昨年、西日本等の果樹産地では、カメムシ類の越冬成虫が果樹園に大量飛来し、本虫の加害による落花・落果・新梢枯死等の被害が生じた。本県においても越冬成虫の飛来に細心の注意を払う。なお、静岡県病虫害防除所ホームページ「[害虫誘殺グラフ](#)」では、本虫に関する各種情報（予察灯及びフェロモントラップにおける発生状況、ヒノキ球果の着果量や球果における寄生数、球果での吸汁痕数、果樹園への秋季以降の飛来予測日等）を随時提供しているので参照する。
- ・静岡県病虫害防除所による今後の「[病虫害発生予察情報](#)」に注意するとともに、地域の予察灯やフェロモントラップにおけるカメムシ類の発生状況を参考にし、果樹園への本虫飛来前の予防的な薬剤散布を心掛ける。また、ほ場で少数でも本虫の発生を確認したら、本虫が集合フェロモンを放出し大量飛来を招く前に、直ちに薬剤防除を行う。また、本虫の移動範囲は広いため、地域での一斉防除が効果的である。なお、ヒノキ・スギ林の隣接地域（特に中山間地）や暴風雨後の園地では、急激に発生が増加する場合がありますので注意する。
- ・薬剤防除については、静岡県病虫害防除所による「[静岡県農薬安全使用指針・農作物病虫害防除基準](#)」を参照する。なお、薬剤の選択に際しては収穫前日数に注意する。
- ・発生状況及び防除対策については、「[令和6年度注意報第6号（かんきつ、びわ、落葉果樹 果樹カメムシ類）](#)」も参照する。

## 【茶】

### ＜生育の概況＞

新芽の生育は平年並～遅く、4月中旬の巡回調査時には調査茶園は摘採前だった。

### ●チャハマキ・チャノコカクモンハマキ

#### 予報の根拠

- ・4月中旬の巡回調査では、チャハマキ越冬幼虫は0.16頭/1.25㎡（平年0.07頭/1.25㎡）と平年よりやや多く、チャノコカクモンハマキ越冬幼虫は0.02頭/1.25㎡（平年0.10頭/1.25㎡）と平年よりやや少なかった。但し、病害虫防除員12名のうち、チャノコカクモンハマキについて4名がやや多、多の回答だった。
- ・4月第1～4半旬の各地域の予察灯及びフェロモントラップへの越冬成虫の誘殺数は、チャハマキは平年より多く、チャノコカクモンハマキは複数の地点で平年よりも多かった。発生時期は両種ともに平年並で、今後の気温が平年より高いことが予想されるため、幼虫の発生は平年並～やや早くなると考えられる。
- ・1か月予報では、降水量は平年並か少なく、気温は平年より高いため、両種幼虫の発生を助長する。

#### 防除対策

- ・一番茶摘採前に成虫の発生が多く見られた茶園では、摘採後に、摘採残葉に寄生している幼虫の発生状況を確認して防除を実施する。
- ・防除適期は、地域の予察灯やフェロモントラップの成虫誘殺状況を参考にして防除時期を決定する。病害虫防除所のホームページ「[害虫誘殺グラフ](#)」に、県内各地の成虫誘殺状況を掲載しているので参考にする。

### ●チャノキイロアザミウマ

#### 予報の根拠

- ・4月中旬の巡回調査では、平均叩き落とし虫数は0.1頭/4か所（平年0.5頭/4か所）と平年より少なかった。
- ・1か月予報では、降水量は平年並か少なく、気温は平年より高いため、発生を助長する。

#### 防除対策

- ・例年、二番茶生育期から発生が増加するので、萌芽期から開葉期にかけて防除を実施する。二番茶の萌芽時期に本虫の発生に注意し、被害が出る前に防除を行う。

### ●チャノミドリヒメヨコバイ

#### 予報の根拠

- ・4月中旬の巡回調査では、平均叩き落とし虫数は0.1頭/4か所（平年0.3頭/4か所）と平年より少なかった。
- ・1か月予報では、降水量は平年並か少なく、気温は平年より高いため、発生を助長する。

#### 防除対策

- ・例年、二番茶生育期から発生が増加するので、新芽の開葉期に防除を実施する。二番茶の萌芽時期に本虫の発生に注意し、被害が出る前に防除を行う。

## ●カンザワハダニ

### 予報の根拠

- ・4月中旬の巡回調査では、摘採面での寄生葉率は2.7%（平年2.6%）と平年並だったが、裾部での寄生葉率は4.3%（平年2.2%）と平年よりやや多かった。地域別では、静岡市北部地域における摘採面の寄生葉率は5.4%（平年2.9%）、富士山麓地域は3.6%（同2.5%）と、県中部、東部地域で多かった。一方、天敵のカブリダニ類の平均叩き落とし虫数は、0.02頭／4か所（平年0.10頭／4か所）と平年より少なかった。
- ・1か月予報では、降水量は平年並か少なく、気温は平年より高いため、発生を助長する。

### 防除対策

- ・一番茶摘採後の残葉でのハダニの密度に注意し、密度が高まる前に早めに防除を実施する。

## ●クワシロカイガラムシ

### 予報の根拠

- ・4月中旬の巡回調査では、平均寄生株率は1.0%（平年5.7%）と平年より少なかった。
- ・1か月予報では、降水量は平年並か少なく、気温は平年より高いため、発生を助長する。

### 防除対策

- ・アメダス気温データを用いた牧之原（菊川市：茶業研究センター）の第1世代幼虫の予想ふ化最盛日は、4月25日現在の計算では5月15日（昨年5月8日、平年5月15日）と昨年より7日遅く、平年並と予想される。
- ・第1世代の幼虫ふ化時期は、第2世代以降に比べ揃うため防除効果が高い。発生が見られる茶園では幼虫のふ化状況を観察し防除を行う。なお、各地の予想ふ化最盛日と防除適期の目安は、病虫害防除所ホームページ「[防除時期等予測](#)」で提供している。

## <その他の病虫害>

### ●チャノサビダニ・チャノナガサビダニ

- ・一番茶摘採残葉や摘採が遅くなった一番茶葉に多発することがある。
- ・雨が少なく乾燥条件が続くと、急激に密度が増加する。著しい被害が発生すると、二番茶芽の生育が抑制されることがあるため、発生が見られたら早めに防除する。

### ●チャノホソガ

- ・新芽生育期と成虫発生期が合致すると発生が多くなる。地域の予察灯やフェロモントラップにおける誘殺虫数の推移や新芽への産卵状況に注意し、適期防除を実施する。なお、成虫の誘殺データについては病虫害防除所ホームページ「[害虫誘殺グラフ](#)」で情報提供している。

### ●炭疽病

- ・3月上中旬の巡回調査では、古葉における平均発病葉数が7.3葉/1.25m<sup>2</sup>（平年19.9葉/1.25m<sup>2</sup>）と平年よりも少なかった。よって伝染源密度も低いと推測される。
- ・感染は新芽の上位3～5枚目くらいまでの新葉に限られる。また、感染には10時間以上の濡れが必要で、新芽の生育期に降雨が続くと発生が多くなる。このため、天候に注意し、二番茶芽の開葉期に防除を実施する。

## ●もち病

- ・昨年10月の巡回調査では、平均発病葉数 0.06 葉/1.25m<sup>2</sup> (平年 3.92 葉/1.25m<sup>2</sup>) と平年よりも少なかった。よって伝染源密度も低いと推測される。
- ・伝染源となる担子胞子の発芽には高い湿度 (99%以上) が必要で、発芽と菌の生育適温は 16～20℃である。多発すると治療剤 (浸透移行剤) でも十分な防除効果が得られなくなるので、茶園をよく観察し、発生初期に防除を徹底する。例年発生がみられる茶園では、二番茶の萌芽～開葉期に予防散布を実施する。なお、耐性菌の発生を防ぐため、DMI 剤の連用は避け、予防剤 (保護剤) と組み合わせて防除する。

## ●褐色円星病 (緑斑症)

- ・4月中旬の巡回調査では、平均発病葉率 31.5% (平年 46.6%) と平年よりも少なかった。多発園では新芽の下の古葉が落葉しており、落葉すると樹勢が低下することから、減収や品質の低下を招く。
- ・一番茶期には防除手段がなく、薬剤による防除適期は三番茶または秋芽生育期である。そのため、発生状況が最もわかりやすいこの時期に発生茶園を確認しておき、適期になったら防除する。

## 【きく (施設)】

### <その他の病害虫>

## ●黒斑病・褐斑病

- ・多湿で発生が助長されるため、施設内環境に注意する。また、病原菌の生育適温は黒斑病 24～28℃、褐斑病 20～28℃である。
- ・本病は潜伏期間が長く、発病後の防除では手遅れとなるので、薬剤の予防散布を行う。
- ・発病葉は感染源となるため速やかに摘み取り、ほ場外に持ち出して処分する。
- ・親株が罹病しているとそこから新芽に伝染し、定植してから発病することが多いため、発病が見られる株を親株として用いない。

### 3 季節予報

#### ● 1か月予報（東海地方 令和7年4月24日 名古屋地方気象台発表）

【予報期間】 4月26日から5月25日

【予想される向こう1か月の天候】

特に注意を要する事項		期間の前半は、気温がかなり高くなる可能性があります。
向こう1か月	天候	天気は数日の周期で変わりますが、平年に比べ晴れの日が多いでしょう。
	気温	平均気温は、高い確率60%です。
	降水量	降水量は、平年並または少ない確率ともに40%です。
	日照時間	日照時間は、平年並または多い確率ともに40%です。
1週目	気温	1週目は、平年並または高い確率ともに40%です。
2週目	気温	2週目は、高い確率70%です。
3～4週目	気温	3～4週目は、平年並または高い確率ともに40%です。

【確 率】

期間	要素	低・少	平年並	高・多%
1か月	気温	10	30	60
1か月	降水量	40	40	20
1か月	日照時間	20	40	40
1週目	気温	20	40	40
2週目	気温	10	20	70
3～4週目	気温	20	40	40

【予報の対象期間】

1か月 : 4月26日（土）～ 5月25日（日）  
 1週目 : 4月26日（土）～ 5月 2日（金）  
 2週目 : 5月 3日（土）～ 5月 9日（金）  
 3～4週目 : 5月10日（土）～ 5月23日（金）

#### ※ 利用上の注意

- ・気温・降水量は「低い（少ない）」「平年並」「高い（多い）」の3つの階級で予報します。階級の幅は、1991～2020年の30年間における各階級の出現率が等分（それぞれ33%）となるように決めてあります。（気候的出現率と呼びます）。
- ・晴れや雨などの天気日数は、平年の日数よりも多い（少ない）場合は「平年に比べて多い（少ない）」、また平年の日数と同程度に多い（少ない）場合には「平年と同様に多い（少ない）」と表現します。なお、単に多い（少ない）と表現した場合には対象期間の2分の1より多い（少ない）ことを意味します。

お問い合わせは

静岡県病害虫防除所 〒438-0803 磐田市富丘678-1

TEL 0538-36-1543 FAX 0538-33-0780

URL

<https://www.pref.shizuoka.jp/sangyoshigoto/norinjimusho/1058658/boujo/index.html>